

たはら歴史探訪クラブ

その11

幕末の異国船対策(一)

江戸時代の終わりにもなると、

ロシア、イギリス、アメリカが新たな市場の獲得をめざし、日本に來航するようになります。一七九二年にロシアのラックスマンが來航し、一八〇六年にはロシア船による焼き討ち事件が起こります。そのため、一八二五年に幕府は「異国船打払令」を出し、江戸湾防備に真剣に取り組むようになりました。と、ここまでは学校で習った日本全体のことです。異国船なんてこんな田舎には関係ない、なんて思う方も多いでしょうが、このタイトルにしたには理由があるのです。

さて、田原藩の領地は太平洋岸に広く面しているため、外国への恐怖をいち早く感じる地理的な環境です。また、当時田原藩には渡辺崋山、三宅友信(一八〇六〜一八八六年) 藩隠居・兵学者・蘭学者、鈴木春山(一八〇一〜一八四六年) 藩医・兵学者・蘭学者) など、西洋事情に詳しい人材が藩の要職にあったため、海外情報を

豊富に持つていました。しかし、その豊富な知識があだとなり、崋山は幕府にあらぬ疑いをかけられたため、その知識を生かした異国船対策は積極的に実行されなかつたようです。

彼らの影響を受けた次世代の村上定平(一八〇八〜一八七二年) 藩家老、西洋砲術家は、天保一二(一八四一)年に当時最先端の高嶋流砲術(高嶋秋帆)によって導入されたヨーロッパ式の銃砲操作、(戦術)を藩に導入し、異国船対策を具体的に実行していった人物です。

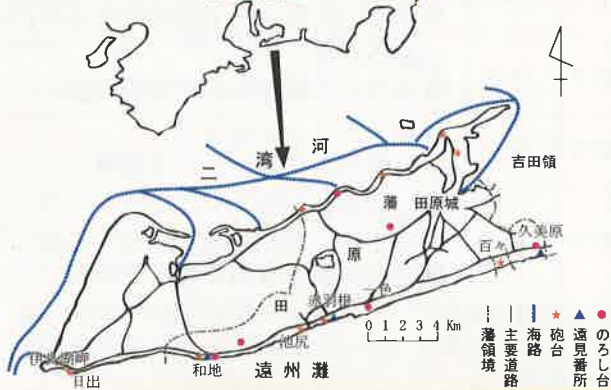
さて村上定平は、まず高嶋流砲術を習った後帰藩し、わずか4か月後の天保一三年に大砲の製造を開始しました。そして、天保一四年には『海岸防備陣容』という異国船対策の計画書を作成しました。

この時点で、田原藩には遠見番所が3か所(赤羽根、久美原、和地)、砲台が6か所(赤羽根、久美原、浦、白谷、野田、和地)、のろし台が3か所(若見、高松、仁崎)あったことが記されています。天保一三〜一四年にかけて驚くべきスピードで改革を行ったのです。

さらに田原藩の先進性が窺える

のは、三河湾に異国船が入ってきたことを想定し、三河湾側にも海防施設を設置したことです。太平洋岸にこれだけの施設があっただけでも全国有数であるのに、ここまで念入りに対策を講じた藩は他には見あたりません。これらの施設は、有事があった場合藩領を守るための機能するものでしたが、そのための訓練を、今は埋め立てられ、トヨタ自動車田原工場の敷地となっている大州崎や、野田の比留輪などでひんぱんに行われていました。

● 渥美半島の海岸防備施設(記録に残るもの)



今月の表紙

みなさんは「黄」という色にどんなイメージをお持ちですか? 一般的には「希望」「幸福」「好奇心」「開放感」「健康」などと言われ、外向的で明るい、たいへん印象の良い色とされていますね。また幼児が好む色でもあり、色彩心理学的には「求愛・甘え」の象徴だそうです。

そう聞けば、なぜ映画の中でハンカチが黄色でなければならなかったのか、合点がいきます。

一方で、日本工業規格(JIS)において、黄色は「注意」を表示する色と決められています。明るく慎重に、そんな感じでしょうか。

それでは、今年一年がみなさんととって明るく希望にあふれ、幸福に満ちたものとなりますようお祈りして、黄色にちなんで次のようなキャッチフレーズを提案してみます。「心はホットに 頭はクールに」

【人口と世帯数】

総人口	36,877人
男性	18,826人
女性	18,051人
世帯数	11,463世帯

出生	33人	死亡	32人
転入	60人	転出	120人
増減	-59人		

(平成13年12月1日現在・増減は11月中)

【行政面積】 82.86 km²
(平成11年10月1日現在・国土地理院調べ)

広報たはらは、森林資源保護のため再生紙(古紙100%)を使用しています。

▽ 田原町博物館 ☎ 22局 1720